

たまのよこやま

板橋区西台後藤田遺跡の発掘

● 遺跡だより 76

● 遺跡だより 77

● くろがね物語(八)

● お知らせ

西台後藤田遺跡の位置する板橋区は、遺跡の豊富な地域として知られています。武蔵野台地の北東端にあり、旧荒川（新河岸川）の支流である蓮根川等の中小河川の恵みにより育まれた集落遺跡が極めて多く存在するからです。

とりわけ、本郷台・成増台崖線上には、旧石器時代・縄文時代から中世までの遺跡が密集しています。本遺跡は、西台東谷と徳丸谷（前谷津谷）とに画された台地上の西台東谷側にあり、今回の調査地点の含まれている第3地点は東谷を臨む台地西側縁辺及び突端部に位置しています。

古くは「西台町貝塚」として呼ばれ、1899年に当時の考古学者伊能嘉矩によって東京人類学会雑誌に掲載された論文（紀行文・遠足記）「荒川沿岸石世時期遺跡探求」により、その存在が知られるようになりました。その後、1953年に今回の調査地点より徳丸谷側（東方向）に約600m程離れた地点を、1953年に縄文土器研究の第一人者であった山内清男氏が指導し、都立北野高等学校の生徒達によって「志村西台遺跡」として調査が行われました。

この時の発掘によって、弥生時代後期の大型住居跡や多数の遺物が発見され、一躍注目される遺跡となりました。当時の出土資料等は、現在も板橋区立郷土資料館で展示され、市民等多くの入館者に郷土の歴史への関心を喚起しています。

さらに1995年から1997年まで、東京都教育庁が設置した都内第二遺跡調査会により、都営西台一丁目団地（第1期）建設工事に伴う発掘により、68棟よりなる弥生時代後期の集落跡が調査されました（第1地点）。この調査を契機に、本遺跡は「西台後藤田遺跡」と単独の名称が付けられました。それまでは、調査地点の一部が、1952年に実施された板橋区史編纂事業に伴う分布調査によって、酒詰仲男氏が名付けた「西台門前遺跡」に含まれているに過ぎなかったのです。

2000年には、区道建設に伴い、板橋区教育委員会等により今回の調査地点の南側（第2地点）の調査が実施され、引き続き2002年には、都営西台一丁目団地の



縄文時代前期の大型住居跡

住棟建設予定部分（範囲）を対象として当センターが発掘調査を実施しました（第3地点）。

住棟建設に伴う道路建設予定範囲の今回の調査では、縄文時代前期後半の大型住居跡、弥生時代後期の火災（焼失）住居の検出等、これまでの調査では検出されなかった奈良時代の土坑や平安時代の住居跡等により構成される集落跡や生活痕跡が検出されています。

これまでの長年にわたる発掘調査により、この地が旧石器時代に起源を持ち、縄文時代から平安時代にかけて集落が営まれ、とりわけ弥生時代後期から古墳時代前期においては、集落遺跡・墓域（方形周溝墓）として盛んに利用され、室町時代から戦国時代には、地下式横穴等の埋葬を含む宗教的色彩の濃い空間として活用されてきたことが判明しました。西台後藤田遺跡（西台町貝塚）の全貌が、このような調査により徐々に明らかになりつつあるのです。（山口慶一）



平安時代の住居跡

本遺跡は、府中市武蔵台二丁目に位置する、武蔵野台地武蔵野面上に広がる大きな遺跡です。都立府中病院敷地内で数か所の地区を発掘し、現在までに旧石器時代の遺物が多量に出土しました。

本年6月から調査を実施している地点（面積約2,600㎡）では旧石器時代の遺物はほとんど出土しませんでした。縄文時代の遺構に出色のものがありましたので、その成果を紹介します。

多量の縄文土器や礫とともに集石3基などが発見されましたが、特色あるのは「柄鏡形敷石住居」と呼ばれる竪穴住居跡1軒です。本住居跡は長径約6m、短径約4mで、大石の敷かれた円形を呈する主体部（写真の右側）と隅丸方形の柄部（左側）から構成されます。敷かれた石は約30～60cmの平らで丸い河原石からなり、ほぼ全面に敷かれています。柄鏡の形に似ているので柄鏡形敷石住居と呼ばれますが、主体部は一般的な住居跡にある部屋の中に相当し、柄部は出入口であると考えられています。

さて、この柄鏡形敷石住居は、縄文時代中期末葉から後期にかけて、関東地方南西部から中部地方で流行しました。かつては共同祭祀の施設とする考えもありましたが、現在では一般的な竪穴住居跡の一種とする意見が大勢です。本住居跡は、約4,500年前の縄文時代中期末葉に属します。今回は1軒だけでしたが、武蔵台東遺跡や武蔵国分寺跡遺跡北方地区など周辺の遺跡で、ほぼ同じ時期のものが10数例発見されています。本遺跡の敷石は主体部のほぼ全面に敷かれたタイプですが、敷き方には様々なものがあるようで、集成して検討してみたいと思います。

（伊藤 健）



柄鏡形敷石住居跡

夏休み親子スペシャル体験教室顛末記

夏休み期間中に実施したいろいろな体験教室に、夏休みの宿題にと多くの親子が参加してくれました。毎回好評の「縄文土器作り」や「勾玉作り」、さらに今年度からは、自分たちで火起こしの道具（舞ぎり）を作製し、それで実際に火起こしの体験をする「火起こし教室」を開催。作った道具はそれぞれ take out していただきました。また、縄文時代の耳飾りの一つである球状耳飾りを、滑石を削って作る「耳飾り作り教室」も新たに始めました。なかなかの出来にみんなご満悦。新たな企画で準備も決して十分ではありませんでしたが、親子そろって半日楽しんでいただけたのではないでしょう



うか。
土器作りの野焼きは、残暑厳しい日差しの照りつける8月29日に行われ、見事60個の土器を無事に焼き上げることができました。

また来年の夏休みも楽しみにしててください。（広報）



くろがね物語 - 八 -

古代の馬具<上>

前回でもふれた馬具について、二回に分けてみていきます。

轡は乗馬の際、馬を制御するための道具です。馬具を着け武者を乗せた馬の姿は、中世の合戦絵巻などに躍動的に描かれています。轡は馬の口に噛ませる銜、手綱に結ぶ引手、側面を固定する鏡板を組み合わせたものですが、多摩ニュータウンNo.178遺跡の村落から出土した平安時代の轡は、少し変わった形をしています。鏡板が知恵の輪のように鉄棒を8の字状に曲げて、2つの環の中央で引手と銜を直接つないでいます。これと良く似た轡は、日野市落川・一の宮遺跡や埼玉県日高市光山遺跡群からも検出されており、いずれも武蔵国に属しています。奈良時代以降、正倉院にあるように中国（唐）風の馬具も輸入されますが、このタイプの轡は古墳時代から見られるもので、いわば伝統的な国産品といえるでしょう。『延喜式』によると、関東諸国では皮革製品や轡・鞍などを特産品として中央に納めていたらしく、馬の飼育とともに馬事文化が盛んな地域だったことが分かります。東国各地に多くの御牧（政府直轄の牧場）が置かれた理由の一つなのでしょう。

さきにみた特徴的な轡も、武蔵独自の文化と鍛冶職人の技があって、はじめて製作できたものかも知れません。（松崎元樹）



多摩ニュータウンNo.178遺跡の轡



馬具の名称（『弓矢と刀剣』より）

遺跡見学会のご案内

多摩ニュータウンNo.446遺跡の見学会を行います。

多摩ニュータウン地域内で最後の発掘調査となるNo.446遺跡。現在、縄文時代と平安時代の住居跡などが多数発見されている集落跡を調査しています。当日は発掘調査の様子と併せてその成果をご覧ください。

日 時：11月11日（土）11時～15時

場 所：八王子市堀之内146他 野猿街道沿い

交通機関：京王線 京王堀之内駅より徒歩15分（駅に案内が立ちます）

バス 同駅より「聖蹟桜ヶ丘」行き「引切」下車

小雨決行（雨天の場合は12日に順延）

駐車スペースはございません。お車のご利用はご遠慮ください。



No.446遺跡調査風景

共催事業のお知らせ

新宿歴史博物館 平成18年度特別展「尾張家への誘い」

徳川御三家江戸屋敷発掘物語 千代田・新宿・文京三区共同企画

展示期間：10月21日（土）～12月3日（日）

開館時間：9時30分～17時30分 月曜日休館

観覧料：大人300円、小中学生100円

交通機関：JR・東京メトロ南北線「四ツ谷」四ツ谷口下車徒歩10分/東京メトロ丸の内線「四谷三丁目」

下車徒歩7分/都営地下鉄南北線「曙橋」A4出口下車徒歩7分



発行

2006年10月20日

(財)東京都生涯学習文化財団 東京都埋蔵文化財センター

〒206-0033 多摩市落合一丁目14-2 TEL 042-373-5296 <http://www.tef.or.jp/maibun/>

R100

古紙配合率100%再生紙を使用しています。